



和歌山製油所 事故で停止

ENEOS

ENEOSは29日午前11時半頃、和歌山製油所（和歌山県有田市、常圧蒸留装置能力12万7500バレル/日）で、装置の稼働に必要な温度や圧力を調整する圧縮空気装置の出口配管が破損したことに伴い、全装置が緊急停止したと明らかにした。全装置停止の過程で流動接触分解装置（FCC）の空気供給機建屋で火災発生も確認したが、火災は同日午後8時35分頃に鎮火したとしている。

ENEOSでは、他の製油所から石油製品を出荷したり、他の製油所から製品を和歌山製油所に運んで出荷を行い、安定供給の確保に努めている。



OPEC+は5月も減産、サウジ自主減産2カ月延長=JPモルガン

[ロンドン 30日 ロイター] - JPモルガンは、石油輸出国機構（OPEC）と非加盟産油国で構成する「OPECプラス」が4月1日に開く会合で協調減産を5月もおおむね継続し、サウジアラビアは自主的な減産を6月末まで2カ月延長するとの見方を示した。

リサーチノートで「（OPECプラスは）6月から8月まで日量50万バレルのペースで生産を増やすだろう」と予想した。

サウジによる日量100万バレルの自主的な追加減産については、7月から2回に分けて日量50万バレルずつ縮小するとの見方を示した。

ウメト インフォメーション

2021年 3月 31日 担当 小松

震災から10年／鹿島／災害廃棄物を資源へ、港湾という出口で迅速化



災害廃棄物処理での粗選別の様子（提供・鹿島）

鹿島は、東日本大震災の被災地で受注した災害廃棄物処理業務で、リサイクル資材としての活用拡大に取り組んだ。宮城県石巻市の「石巻ブロック」では、膨大な量の処理が求められる状況下で、港湾埋め立て基準を満足する土木資材としてのリサイクル化を実現。大量の活用先という“出口”を設けたことで迅速な業務完了につなげた。港湾埋め立てに用いた物と同じサンプルを保管して、長期的に試験も続けており、今後の災害対応などに生かしていく方針だ。

石巻ブロックは宮城県の発注で、県内最大規模となる約300万トンの災害廃棄物を処理した。焼却灰の造粒固化技術や、不燃残さを徹底的に分別する「精選別技術」を導入。津波堆積物を洗浄したり改質剤を混合したりして土木資材へのリサイクル化を推進して、最終的には85%のリサイクル率を達成した。

洗浄したれきと汚泥を不溶化処理した汚泥改良材は、石巻港の埋め立て資材に活用した。重金属などの溶出に対する長期安定性の試験方法などを議論してもらった有識者委員会も設置して検証。スムーズな産学官の連携が奏功し、強度などの物理特性と有害物の溶出など環境面の両方で平時の基準をクリアする品質を確保した。

今回は港湾だったが、被災地の条件によっては、河川や陸上などがさまざまなケースが想定され、それぞれに求められる基準が異なる。同社環境本部の担当者は「焼却灰でも処理をすればリサイクルができる。対象ごとにどのような処理を施せば埋め立て可能となるかを事前に検討しておくことが望ましい」と話している。

三菱化学 ガス メタノールで循環社会 から製造 新潟に実証設備

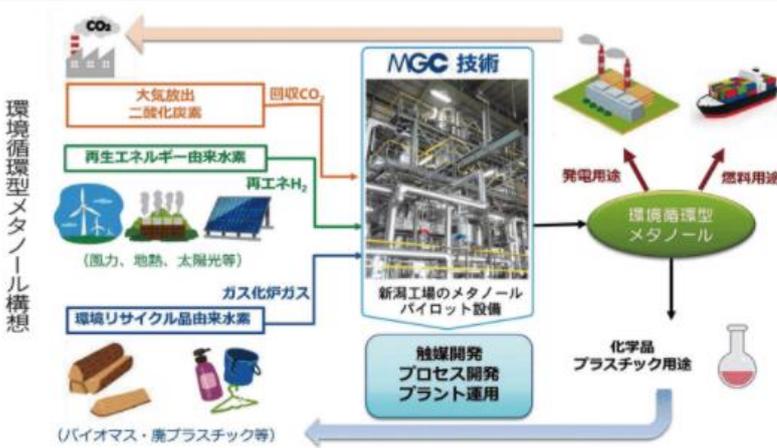
三菱化学は30日、工場や発電所などから出る二酸化炭素(CO₂)、廃プラスチックなどを原料に化学品や燃料、発電用途に使われるメタノールの製造技術を開発すると発表した。新潟工場(新潟市)のパイロット設備を改造し、今年7月に実証実験を開始。多様なCO₂排出源に対応できる技術を確認し、2022～23年にライセンス供与に乗り出す計画だ。培ったメタノールの生産技術を活用し、脱炭素社会や循環型社会の実現に貢献する。

基礎化学品のメタノールはエチレンやプロピレンなどの化学品原料に使われるほか、グリーンエネルギーである水素のキャリア(輸送媒体)、船舶やボイラー燃料などの用途でも注目される。三菱化学にとり、メタノールは中核事業の

1つ。メタノールは天然ガスなどからつくられるのが一般的だが、同社は自社開発の触媒技術に基づき、長年蓄積してきた合成技術、海外製造拠点での操業経験や製造ノウハウを生かし、CO₂と水素を原料にしたメタノール製造技術の開発にも取り組んできた。

新潟工場ではまず、工場や発電所などから出るCO₂を想定したメタノールの製造技術を開発する。各種試験やCO₂処理量で日量1・5トンの連続運転などを通じてプロセスの最適化、技術課題の評価・検討を行い、22年内のライセンス供与を目指す。さらに廃プラスチック

チックや木質バイオマスなどの非化石資源をガス化炉で熱分解して得られるCO₂を含む燃焼ガスからメタノールを製造する技術も確立し、23年内にライセンス供与を始める計画だ。CO₂を多量に排出する電力会社や化学、石油精製、鉄鋼、自治体など



のごみ処理施設に技術をライセンス供与し、敷地内などにメタノール製造プラントを設けるオンサイト型での普及を想定する。デジタル技術を活用したプラント運転操作の自動化、遠隔支援システムなどの技術支援サービスも提供。つくられたメタノールの有効活用、販売などにも対応していく。三菱化学は工場などから出るCO₂や廃プラスチック、グリーン水素などから製造する「環境循環型メタノール」製造技術の実用化に向けて、エンジニアリング会社やプラントメーカー、再生可能エネルギーの電力による電気分解で「グリーン水素」を製造する企業などと協業を図る方針だ。

「パラレジン」普及へ

ユーグレナ
など4者 コンソージウム設立

ユーグレナ、セイコーエフソン、NECは29日、

東京大学の岩田忠久教授と、バイオマスプラスチック「パラレジン」の技術開発・普及促進に取り組み「パラレジンジャパコンソージウム」を設立すると発表した。パラレジンは微細藻類ユーグレナ(和名・ミドリムシ)の貯蔵多糖「パラミロン」が原料で、スプーンや皿、時計の部品などに成形できること、耐久性についても確認している。3社はパラレジン製品化までの各ステップの規格化に取り組み、2030年に

年間20万ト規模の供給を目指す。

コンソージウムでは、セイコーエフソンがミドリムシ培養時の栄養分となる古紙や食物残渣などのセルロースを酵素糖化技術で分解した糖化物の規格化、ユーグレナがミドリムシから抽出・精製するパラミロンの規格化、NECがパラレジンの規格化と活用検討を担う。パラレジンは特異な構造を持つため、バイオマスプラスチックとして新たな性質を有する可能性があるという。市場では高付加価値性を追求



会見に臨むユーグレナの出雲社長(左から2番目)、東大の岩田教授ら(右端)

しながら、将来的には石油由来のポリプロピレン

(1キログラムあたり1000〜2000円)と競争できるような価格帯にしたいと考えてだ。

国内で現在、年間に消費されているプラスチックは1000万ト規模に上る。バイオマスプラスチックの生産は年間4万ト規模にとどまっており、世界における年間生産量200万トとの間には大きな開きがある。都内で同日開かれた会見において、ユーグレナの出雲社長は「政府は30年までにバイオマスプラスチックの年間生産量を200万ト規模に拡大するとの目標を掲げている。コンソージウムを通じ、目標の前倒し達成に貢献できるよう努めたい」と語った。

価格修正 ダイシエント

(3月22~26日)

とくに表記のないものは1キログラム当たり

【ポリエチレン・旭化成が4月1日からサンテックI、D、同IHD、同IEVA、クレオレックスを20円以上値上げ。
【プロピレンオキサイド・AGCが4月1日から40円値上げ。
【酒類・丸善石油化学が4月1日からメチルエチルケトン、高沸点溶剤、スワフリンMCH、マルカゾールR、マルカゾールSを30円以上値上げ。
【要成シリコーンポリマー・カネカが4月1日からカネカMSポリマー、サイリルを10円以上値上げ。
【エチレングリコール類・三菱ケミカルが4月1日からモノエチレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコールを14円以上値上げ。
【PG類・ADEKAが4月1日からプロピレングリコール(PG)、ジプロピレングリコール、トリプロピレングリコール、ポリプロピレングリコールを70~90円値上げ。
【アクリル酸エステル・日本触媒が4月1日からアクリル酸ブチル、アクリル酸2エチルヘキシルを20円以上値上げ。
【ビスフェノールA・日鉄ケミカル&マテリアルが4

月1日から50円以上値上げ。

【PPGなど・三洋化成が4月1日からポリプロピレングリコール(PPG)とポリマーポリオールをナフサ価格変動分以外で30円以上値上げ。
【フェノール樹脂・群栄化学工業が4月1日から現行比20%値上げ。
【可塑剤・田岡化学工業が4月1日からアジピン酸系のDINA、6IOA、DOAを32円、その他を28~45円、セバシン酸系のDOSを28円、DBSを23円、クエン酸系のABCを28円、その他エステルを27~33円値上げ。
【MMAなど・三菱ケミカルが4月1日からメチルメタクリレート(MMA)モノマーとメタクリル酸を25円以上、メタクリル酸エステル類を20円以上値上げ。
【樹脂・DICマテリアルが4月1日から不飽和ポリエポキシ樹脂を38円以上、ビニルエステル樹脂を48円以上値上げ。
【発泡性ポリスチレンビーズ・積水化成工業が4月1日から一般グレードを25円以上、特殊グレードを30円以上値上げ。
【ナイロン66樹脂・宇部興産が4月1日から115円値上げ。

【ポリカーボネート・住化ポリカーボネートが4月1日からSDボリカのPC/PBTグレードを国内で130円以上、海外で1~3円以上、他の全グレードで1~0円以上値上げ。
【高吸水性樹脂・日本触媒が4月1日からナフサ価格の上昇分とは別に15円以上値上げ。

PPGなど30円超

三井化学SKC

三井化学SKCポリウレタンは、4月1日出荷分からポリウレタン原料を値上げする。対象はポリプロピレングリコール(PPG)、ポリマーポリオール(POP)類、レジンプレミックス類で、改定幅はナフサ価格変動分以外で1キログラム当たり30円以上。原材料価格が予想を超えるレベルで上昇し、物流や設備補修などの費用も増加している。自助努力での吸収が困難な水準に達し、価格を改定せざるを得ないと判断した。

製品値上げ

三井化学、BP Aなど60円以上

三井化学は、4月1日納入分からビスフェノールA(BPA)とエポキシ樹脂を値上げする。改定幅は1キログラム当たり60円以上。BPAの価格は主原料ベンゼン、ナフサ、用役(C重油)などのコストを勘案して協議のうえ決定。エポキシ樹脂の価格改定は主原料BP A、エポキシロルヒドリン、力性ソルダの価格変動をベースに協議のうえ実施している。ベンゼンは1キログラム当たり96円、ナフサは1キログラム当たり4万7000円、C重油は5万7000円を超える水準が見込まれている。増加コストは自助努力で吸収できる水準を超え、安定供給を維持するには価格を改定せざるを得ないと判断した。

住友ベークライトは、樹脂・成形材料

住友ベークライトは、4月12日出荷分から工業用フェノール樹脂「スミライトレジンPR」およびフェノール樹脂成形材料「スミコンPM」を値上げする。1キログラム当りの改定幅はフェノール樹脂の固形が50円、液状が25~40円、成形材料は20~30円。ベンゼンやメタノールなどの急騰によって、主原料のフェノールやホルマリンの価格も上昇。ガラスチップなどの原材料や、輸送・容器荷造りなどのコストも増加するなか、安定供給を継続するうえで価格改定は避けられないと判断した。

エポキシ粉体 塗料など10%

住友ベークライトは、4月12日出荷分からエポキシ粉体塗料「スミライトレジンECP」、液状エポキシ樹脂「スミマックECR、ECH」を現行比10%値上げする。ビスフェノールAやエポキシロルヒドリンなどの原料が高騰しているほか、輸送などの費用も増加している。コスト負担は限界に達しており、安定供給を継続するうえで価格改定は避けられないと判断した。